

# さくらそう通信



阿部家伝来の扇面散図屏風（白河集古苑所蔵）

扇面桜草図（阿部家伝来の扇面散図屏風部分）



## 江戸時代の大名・阿部家の屏風に サクラソウを見る

磯田 洋二

福島県白河市には南湖公園・小峰城・白河の関などの名勝・史跡・文化遺産がたくさんあって、『歴史と文化のまち』として知られています。そして、たくさんの文化遺産を保存管理し展示するための白河市歴史民俗資料館や白河集古苑という立派な施設があります。南湖公園の隣にある白河集古苑では、平成8年に「近世大名阿部家の遺宝展」が開かれました。

ここに登場する阿部家は、三代将軍家光に老中として仕えた阿部忠秋の代に徳川の譜代大名となった家柄で、寛永12年（1635）からの約4年間を下野壬生城（現在の栃木県下都賀郡壬生町にあった城）の城主として、寛永16年（1639）からの約184年間を武蔵忍城主として、文政6年（1823）からの約45年間を白河城主として過ごしています。武蔵忍城は現在の埼玉県行田市にあった城ですから、埼玉県とは浅からぬ縁があった訳です。

かって埼玉にいた譜代大名ということに興味をもったので、この展示を見に行きました。そこには武家としての武

具・衣服・装身具のほか、書画、絵図、文具、茶道具、陶磁器などいろいろな物品がたくさん展示されていて、そのどれもが普代大名を忍ばせる立派なものでした。その中にこのたび紹介する屏風があったのです。（上 写真）

その屏風は江戸時代に作られた扇面散図屏風と呼ばれるもので、6面（個）に折り曲げられる縦170cmに横382cmの金屏風で、両面に合計で61面（個）の扇が描かれています。扇のそれぞれには彩色された絵が描かれていて、思わず一つ一つを丹念に見てしまうという作品なのですが、残念なことに誰が描いたのかわかっていません。絵には山水、花鳥、人物などいろいろと描かれていて、それだけでも楽しめるのですが、人物の画題には風俗・物語・道釈（人の守るべき正しい考えを説くこと）などが取り上げられていて、いつまで眺めていても見飽きることのないものでした。

一つ一つの扇絵を目で追いながら観賞していると、なんとサクラソウの描かれている扇絵があるではありませんか。サクラソウは扇の中いっぱい3株も写実的に描かれているのです。細かく観察すると、左端のサクラソウには7枚の葉と、3個の花と1個の蕾をつけた1本の長い花茎があり、その脇に1個の花と2個の蕾が描かれていて、もう1本の短い花茎があることを思わせます。中央のサクラソウに

は10枚の葉と、4個の花と4個の蕾をつけた1本の長い花茎があり、その脇に2個の花と2個の蕾が描かれていて、ここに1本の短い花茎があることを想像させます。そして、右端のサクラソウには7枚の葉と、3個の蕾をつけた1本の花茎があり、その脇に2個の蕾が描かれていて、1本の花茎があるように描かれています。3株とも大きな葉が7枚以上もあって、花茎が2本ものびていることから、とても良く育った大きな株を描いたものでしょう。しかし、どの株にも花茎が1本しか描かれていないので、脇に描かれている花や蕾は、絵に賑わいを与えるために付け加えて描いたものかも知れません。

ところで、描かれているサクラソウの葉を見ると、表側を濃い緑色で描き、裏側は白い緑色で描いてあるので、実際のサクラソウよりも表と裏の色の違いが強く表現されていて、サクラソウとは別の種類のように見えます。しかし、葉面の幅と長さの比率、葉身と葉柄の長さの比率、葉脈と葉脈の間が盛り上がっているようす、緑の鋸歯（ぎざぎざ）のようすのどれをみてもサクラソウの特色を正確に示しているのです、間違いなくサクラソウを描いたものです。次に、花を見ると、花の形や咲き方は野生種に多く見られる広い桜弁（桜の花びらの形の花弁）の平咲き（平らに開く咲き方）で、受け咲き（上向きの咲き方）になっていますが、花の色は野生種のような紅色の単純な花ではなく、薄い桃色に底桃色（花の中央の部分が桃色）と目白（花の中心が白）の現れた複雑な花になっています。また、花の大きさは直径3cm~4cmほどの中輪で、野生種より少し大きいことが、描かれている葉と比べることでわかりました。これらの花の特徴から、描かれているサクラソウは野生種ではなくて園芸品種であることが明らかです。サクラソウを栽培して園芸品種を作り出すことは、江戸時代に盛んに行われるようになったので、この扇絵も栽培されていたサクラソウの園芸品種を描いたものだと思います。

そこで、描かれたサクラソウの園芸品種の名前を調べることにしました。江戸時代に育てられたサクラソウの園芸品種は300以上も記録されていますが、その多くは消滅して、現在まで伝えられているのは60以下なので、描かれたサクラソウはすでに消滅している場合もあります。また、サクラソウの園芸品種は、花の裏側のようすや雌しべの長さなどもわからないと正確に調べられないので、描かれたサクラソウのように花の表側だけでははっきりとしない場合もあります。このような条件がつかいましたが、今までにわかったことを手掛かりにして調べたところ、江戸時代後期に作り出された『夕映（ゆうばえ）』という名前のサクラソウにとっても良く似ていることがわかりました。改めて、屏風に描かれた扇絵を見渡すと、ほかの絵に比べてサクラソウは大きく描かれていることに気付きました。当時流行っていたサクラソウなので、目に付きやすいように描いたのかも知れません。

阿部家が城主であった武蔵忍城の付近には、東方にあった小針沼の沼尻の湿地や、北側を流れる忍川に沿った谷郷の湿地にサクラソウの自生地があったと伝えられ、また、明治3年（1870）に出版された藤森大雅の「記三浦氏草桜」という記事に、忍藩の御殿医であった三浦泊翁が多くの変化に富んだサクラソウを栽培して観賞していたと述べられています。あるいは、忍城にもサクラソウが栽培され観賞されていたかも知れません。そして、そのサクラソウが、御殿医の三浦泊翁が栽培したサクラソウが、屏風の扇絵として描かれたのかも知れません。このように資料を基にして想像すると、話が次々にふくらんで面白くなります。

江戸時代には多くの絵図にサクラソウが描かれています。そのことの多くは広く知られています。しかし、阿部家の扇面散図屏風に描かれているサクラソウについては、余り知られていないようなので、ここに紹介させていただきました。

最後に、阿部家の扇面散図屏風を紹介するにあたり、資料の利用を快く許可してくださり、また写真の撮影をしてくださった白河集古苑館長の鈴木敏行様はじめ学芸員の方々、そして、白河集古苑所蔵資料の特別利用に必要な許可の申請や、利用する写真の撮影を学芸員の方にお願するなどの労をとっていただいた白河市在住の芳賀智恵子様、記して感謝申し上げます。

## 消えるさくらそう自生地・蘇る自生地

吉岡義雄



藤原町(栃木県)の自生地 (平成12年撮影)

さくらそう通信第3号で、信州で絶滅寸前のさくらそう自生地を自費で買取り、一命をかけて守り抜こうとした一老人の快挙を発表した事がある。その後どうなったのだろうか？ 老人は、さくらそうが、日本のどこかで咲き続ける夢を描きつつこの世を去った。かつての自生地には砂防ダムが完成し、周囲の環境は一変した。このことは、防災上の立場から人命を優先し「脱ダム宣言」を唱える現知事の発想の原点の一つであろうと思う。しかし、この老人の努力は地元や全国のさくらそう愛好家に受け継がれ、鉢の